●炭窯再着火を 20 日行う

今回はいろいろ失敗した経験から，焚口での燃やし方をいろいろ反省しました。要するに前回は原木に燃え移っていなかったのです。焚口で長い時間燃やし続けたけれど原木に火が移らなかった。それは火力が弱かったからとか、遠く離れていたからとかが考えられます。着火の前に原木を炭窯一杯に立てかけてしっかり隙間なく詰め込むのですが、失敗した原因として、今回は「炭窯の天井まで隙間なく押し込められてなくて、原木の上を焚口の火力が煙突部分を素通りする流れになっていたから原木に燃え移らなかった」と推察できるということが事務局会議で明らかにされました。焚口からのぞくと判明したそうです。

再着火した際には原木の上にしっかり燃えやすい材料を詰め込むように改善したそうです。焚口では着火の時は、できるだけ奥の方で燃えるようにするのが良いようです。そして最初が白い煙なのは焚口で空気が十分供給されていたのです。炭の原木に火が移ると大量の空気が必要となるので完全燃焼できなくなり、煙が排煙されるのでしょう。激しい黒い煙が勢いよく出てきます。その時期が過ぎると次第に煙の勢いがなくなり白い色の排煙になり、排煙の勢いが弱くなった頃を見計らって、空気の遮断を完全に行って窯の温度が下がるのを待ちます。

着火から少なくとも７日目ごろに窯開きが可能になります。慌てて短期間で窯開きをすると空気を供給することになり、出来上がった炭がおこりだしてしまうことになりますから、十分窯が冷えてから窯開きをしなければなりません。こういった手順をしっかり押さえて経験と感覚を積み重ねなければなりません、失敗を恐れないで回を重ねることです。

特に今回の再着火に当たっては５か所に温度センサーを取り付け、できるだけ科学的にデーターを得て教訓を生かす為に頑張ってくださいました。今回の失敗から多くの改善点を学びました。

●3 月 26 日金曜日の午後に国交省淀川河川事務所に 2020 年度の木津川稀少種植生調査管理業務の業務報告に出向きます

管理調査個所は 39 カ所で八幡市の京阪鉄橋付近から木津川市加茂町の小谷付近まで 24 ㎞の両岸に生育する絶滅危惧種や絶滅寸前種の生育場所を生育調査と除草作業を年間を通じて行っているのを写真などで状況を記録したものを書類にまとめて、業務の終了の監査に提出し、監査を受けて承認を得ることになります。書類は 220 枚になり随分分厚くなります。特に証拠写真が重視されるのでかなりのボリュームになります。そして近頃は電子データーも紙資料と同様に提出が義務付けられているので、作業が大変です。年度末の多くの作業が重なってきますので書類づくりが大変です。日頃から丁寧に作業行っておけば簡単なことですが、専従者がいない団体なので事務作業は大仕事になっています。

●通常総会

今年の通常総会は 2 年間理事として里山の会の運営に責任をもって運営にかかわってきていただいた理事の任期が切れてあたらしい役員を選出しなければならないことになっています。2 年前には理事長の病気発生があり継続不可能との意思表明から理事選出に大変苦労をしました。今回は理事長をあの時期にがばっていただき急場をしのぐ決意をされご奮闘いただいた深田理事長が思いもよらない脳梗塞により職務を継続することはできないと勇退を希望されています。また長年奮闘されてきた常務理事の山村さんも同じく脳梗塞を克服され職務に復帰されていますが、これも従来のようにはいかない体調で職務は継続できないとなっています。事務局会議で現職理事は留任を確認してきましたが、幹部中の幹部が脳梗塞という再発の危険がある中でこれ以上の責務はご無理と思われます。軽い作業やご協力は可能な範囲で期待できますが、激務をお願いするのは得策ではないと思われます。これまで事務局会議で確認してきた留任原則を確認しながらも止むを得ない事態でもありますので新しい体制を組みなおさなければなりません。皆様方のご協力を得たく心よりお願いいたします。

●竹蛇篭への工夫　シリーズ 5 回

さていよいよ製作にかかわることになったが、竹蛇篭は言葉でわかるが現物も知らないものばかりだったので、竹門先生の紹介で静岡県の原小組さんを訪ね製作現場を再生いただき大いに学びました。お金も何もなく予算も何もなく、あるのはやる気だけのもの 8 人が行きました。ワンボックスカー満員で真夏の 8 月 8 日出かけました。途中で自動車のクーラーが効かなくなって、真夏にまるで蒸し風呂状態で大井川中流の山の中で学習を行ってきました。

竹の準備にかかるのですが見分け方が大変難しく孟宗竹や淡竹、真竹はそれぞれ特徴があるのですが真竹と淡竹の様子は殆ど同じで筍の季節にならないとわからないということで苦労しました。とりあえず真竹という藪から切り出しました。直径 70 ㎜前後のものでなければ素材とならないので、長らく放置されていて足の踏み場もない藪を探しまくって適当な竹を見つけました。予想しなかった非常に骨の折れる大仕事になりました。特に真夏の藪は暑くて、暑くて、そのうえ大きな藪蚊が群がってきて、それはそれは大変でした。それをまた後日切り出すのですが、全長 10m以上のものを何十本も切り出して、枝を払い長さと太さを調整し堤防の天端迄持ち上げ、運び出す作業は至難の作業でした。